

夏期講習だより

第2号

夏期講習運営委員会（文責； 矢澤 純子 伊那西小）

5月28日（火） 第1回夏期講習会事前読み合わせ会報告

第1回読み合わせ 令和元年5月28日（火）

読み合わせ範囲 「西田哲学選集」第一巻 「西田幾太郎による西田哲学入門」

第二部 「善の研究」 第一編 純粹経験

司会者 柄澤 克彦 先生（伊那東小学校）

レポーター 関 佑介 先生（南箕輪小学校）

○レポーター発表 関 佑介先生

- ・自分自身が、哲学と向き合うことが、純粹。
- ・調べ続ける、読み続けていることが純粹経験になっている。初めてのことは不安である。
- ・中学校勤務のあと、赴任した小学校。担任が知らないことを授業で行えるのか。見通しの持てないことをやって学習が成り立つのか不安であった。
- ・ある研修会で初めて和太鼓体験をした。和太鼓のバチを握った際に感じた大きさ、太さ、重さ、材質、なめらかさなど、予備知識のない自分には、純粹体験であった。なかなか講師の先生のように、打てなかった。
- ・総合の時間で太鼓をやっている5年生の担任から誘いを受け、3年生の自分のクラスで太鼓発表を鑑賞した。
- ・3年生のクラスの児童K君から「クラスのみんなどかっこよく演奏したい。」の一言があった。
- ・4年生になり、その子の願いが伝わり、総合の時間は太鼓に決まった。
- ・自分の体験で感じた「クラスで一緒にやってみよう。」とK君の「クラスの皆とかっこよく演奏したい。」の根本は同じだと感じた。それは「やってみたらすごくおもしろかった。」ということ。同じことを感じることで嬉しくなった。

○グループ討議のまとめ

- ・新しいことがいやだなと思うだけ。やってみないとわからない。行動しよう。→それが行為となるか。
- ・5・6年生を担当しているが、非常に子どもは怖がる。失敗する前にやめたりすることが多い。
担任がキーパーソンになるのではないかと。子どもがころぶ前につえを渡しているようなこともある。子どもたちが失敗してそれを受け入れていくという経験もある。
- ・子どもたちとの関わりから。やってみようという気持ちは不安もあって、そういう気持ちを抱えている子が多い。
- ・何かのきっかけで大きく変わっていく。大人も子どもも。
- ・教師自身が変わっていく。どういう体制で関わろうとしているかで変わっていく。
- ・繰り返すことで無意識にできるようになっていく。
- ・純粹経験とは「はっとする経験をすること」。
- ・日々純粹経験をしている。そのままを知ること。事実って何だろうと深まってしまうと難しくなる。
- ・経験を繰り返して、判断が変わってしまうと純粹経験ではなくなってしまう。

- ・低学年。純粹経験を多くしているように思う。ある子がじっと川を見つめている。きれいだと思って見ていると思ったので声をかけたら「先生ちがう。音がちがう。」という返事。「ポコポコという音と、ザーツという音がしているところがいい。」という返事。川を見て何かいいと感じている子ども。
- ・何かいいと感じること。自分の考えていたことを打ち切ることに出会った。そういうことを積み重ねていくとよいクラスができるのではないかと思った。

○唐澤正吉先生のまとめ

・西田哲学について

ジェームスの言葉を使ったりしているが、西田哲学には現実を考えること、住んでいて、働いていて、その見方で考えるということ。本当の現実是我们がその中に居る（生きている）世界。見方の相違。実際の場面を思い浮かべると、共通した考えが持てる。

※1 各章の叙述方法の特徴

最初に（各章の冒頭に）その章の主題となる概念を簡潔に定義・規定することから始め、ついでに更に詳しく論じていくという筆法をとる。何回も繰り返し論述されている。（したがって、琴線に触れる言葉を拾えば、必ず主題に繋がっている。） 中途に、それぞれに対する批判も入るので、私たちの頭の中は混乱する。（難しい）

最初の一章の説明が、第2章にも入っている。言葉にできない瞬間のものを純粹経験と呼んでいる身体全身がしびれたその瞬間。我を忘れてその瞬間は5分、10分と続く現実もある。本当にひたっているものはあつという間に時間が経ってしまうということ。

・関先生のレポートから

難しいなあと思うこと。自分がどんな段階でもまずはやってみる。とても大事な言葉である。能動的とは、未体験、個人的経験の区別よりも見ることができた経験ではなく、自ら働きかけた経験であった。まずは、やってみようとして一緒に考えていく。子どもと向き合い共に感じて歩む。そういうところがよい。そんな体験をしたんだということが伝わってくる。

例えば、運動会の練習でみんな揃うように、みんなきれいになるように指導をしているが、それは全てではないと思う。1・2年生の頃は、子どもたちが自由に動いていいよというと、すごく生き生きしてくるのではないか。子どもと一緒に創り上げていくということ。夢中になって我を忘れていく経験が純粹経験である。見ることから知り、感じる事が大事。

※1 下線の部分 事前読み合わせ会によせて 唐澤先生の資料より抜粋。